

第5節 高校2年生

国際理解と平和 おきなわなう

～現在の沖縄から見えるもの～

曾我雄司・西川陽子
金子純・鈴木善晴
加藤直志・川合勇治

【抄録】 高校2年生の総合人間科は、「国際理解と平和」を大テーマとするグループ研究であり、11月の沖縄研究旅行とも連動した大掛かりなものである。従来の「平和」＝沖縄戦の学習という部分は継承しつつも、今年度は、現在の沖縄の在り様を念頭において研究を進めさせることを意図した。

【キーワード】 国際理解 平和 グループ研究 沖縄 沖縄戦 基地問題

1. 目標

高校2年生の総合人間科は、11月に行われる沖縄研究旅行における実地見学・フィールドワークを中軸としながら例年進められている。また研究にあたっては、5～8人程度のグループをつくって、事前学習・フィールドワーク（FW）・研究集録作成・発表を行っている。

今年度もこの方法を踏襲し、グループ学習を通じて生徒たちが相互理解を深め、協力して問題解決にあたる姿勢を持つことを目指した。一方で机上の空論や理想論、客観的なだけの研究に陥らないために、「現在の沖縄の問題」を切り口にして、現代の世界が直面する「国際理解」の問題、「平和」の問題を考えさせることを目指した。一年間の学習を通して伸ばしたい力は、以下のとお

りである。

- ・現在の問題を認識し、その原因を探っていく力
- ・現在の諸問題の関係性を認識し、整理・分析する力
- ・グループで協力して課題を設定し、その課題を解決する力

2. 学習方法

- 1) 『沖縄修学旅行』輪読会・映画『月桃の花』鑑賞会を通じて、フィールドとしての沖縄について、基本的な知識を身につける
- 2) フィールドワークを実施する（FW先の検討と決定・アポ取り・依頼状執筆・FW・お礼状執筆）
- 3) 研究集録にまとめる
- 4) クラス内・学年内で発表する

3. 活動内容

(1)年間計画

回	日付	プログラム
1	4月15日	ガイダンス：下見報告・事前アンケート
2	4月21日	プレ研究1：『沖縄修学旅行』輪読会の分担など
3	4月28日	プレ研究2：輪読会準備 VI章「キーワードで読む沖縄現代史」発表（クラス内での発表）
4	5月19日	プレ研究3：輪読会I～V章発表（グループ内での発表）
5	6月2日	映画『月桃の花』観賞
6	7月7日	研究グループ結成・テーマ決定
＜夏休み＞テーマについて下調べ & FW先候補を考えてくる		
7	9月1日	研究テーマ・FW先の検討・絞り込み
8	9月8日	研究テーマ・FW先の検討・絞り込み
9	9月29日	係別会&質問事項検討
10	10月13日	アポ取り&依頼状執筆
11	10月20日	依頼状執筆・送付&下調べ
12	10月27日	直前調べ
	11月8-11日	沖縄研究旅行
13	11月14日	御礼状執筆（事後指導の時間で実施）

14	11月17日	FWのまとめ
15	11月24日	集録下書
16	12月8日	集録下書
17	1月12日	発表準備
18	1月19日	発表準備
19	1月26日	クラス内発表
20	2月2日	学年全体発表
21	3月8日	事後アンケート・高校1年生に対する発表

(2)プレ研究

例年、4月から数回の授業の時間が、研究旅行に行く沖縄についての基礎的な知識を身につけることに充てられる。今年度は参考文献一冊をしっかりと読み込むことで事前学習を進めた。

近年の生徒はインターネット等で容易に答えを探り当てることは得意だが、その情報には不確かなものも少なくない。一冊の本としてまとめられた確かな知識の上に、グループの研究を進めてほしいとの願いがここにある。

テキストとしたのは、新崎盛暉・仲地哲夫・村上有慶・目崎茂和・梅田正己『第3版 沖縄修学旅行』（高文研、2005）、沖縄戦から基地問題・自然環境・歴史・文化、最近の情勢まで幅広くとらえた書籍である。クラスを5つのグループに分け、最初にグループごとにⅥ章「キーワードで読む沖縄現代史」のキーワードを分担させ、模造紙に内容をまとめてクラス内で発表させた。その次の時間でⅠ～Ⅴ章の内容についてグループ内で分担して要旨をまとめさせ、グループ内で発表させた。

事後の感想の中には、「ひめゆり学徒隊の仕事や、集団自決の様子が多岐にわたって、恐ろしかった」という沖縄戦の悲惨さを認識した声だけではなく、「沖縄の中のことだけでなく、アメリカや中国とのつながりをみていきたい」「沖縄の人の考える基地の存在とかはどうなんだろう」といった声もあった。沖縄の諸問題を理解した上に、沖縄への関心が高まり、研究への道筋が見えてきたことが評価できる。



(3)旅行日程

1) 旅行の日程 (11月8日～11日)

<1日目>

中部国際空港 — 那覇空港 = 轟の塚 = ひめゆり資料館 = 首里城公園 = ホテル・那覇 夕食後 平和講話 (安里さん)

<2日目>

那覇 = 嘉数高地 = 平和祈念公園 (韓国人慰霊の塔・資料館・平和の礎) = 魂魄の塔・米須海岸 = 国際通り = ホテル・那覇 夕食後 エイサー体験

☆当日は大雨のため、韓国人慰霊の塔・平和の礎・米須海岸には行けなかった。

<3日目>

那覇 = <終日 タクシーにて班別研究> = ホテル・読谷 夕食後 平和メッセージ執筆

<4日目>

読谷 = 安保の見える丘 (道の駅) = 那覇空港 — 中部国際空港

2) 研究テーマとフィールドワーク先一覧

A組1班「基地問題～解決しないその理由～」

沖縄県知事公室基地対策課、沖縄国際大学

A組2班「沖縄の自然環境」

琉球大学、漫湖水鳥・湿地センター

A組3班「貿易の歴史」

那覇市歴史博物館、沖縄県立博物館

A組4班「沖縄の食文化と平和」

沖縄県福祉保健部健康増進課、琉球大学

A組5班「琉球王国」

護国寺、琉球大学

A組6班「沖縄戦と平和」

旧海軍司令部壕資料館、那覇市歴史博物館

B組1班「沖縄の基地問題」

沖縄国際大学、読谷村役場跡地利用推進課

B組2班「基地と自然環境」

沖縄県環境生活部自然保護課、琉球大学

B組3班「アジアの中の沖縄」

沖縄県企画部企画調整課、沖縄大学

B組4班「沖縄の伝統芸能に込められた思い」

沖縄国際大学、沖縄市立郷土博物館

B組5班「沖縄の歴史と平和」

那覇市歴史博物館、南風原文化センター

B組6班「少年兵と沖縄戦」

社団法人養秀同窓会、沖縄県立首里高等学校

C組1班「基地とその周辺の影響」

沖縄県知事公室基地対策課、宜野湾市役所基地政策部

C組2班「サンゴ礁～基地が与える影響～」

琉球大学、海の種

C組3班「アジアの国際環境と平和」

沖縄平和協力センター、沖縄・ベトナム友好協会

C組4班「沖縄の文化と平和～食と音～」

沖縄県立芸術大学、琉球大学

C組5班「～琉球王国交易史～」

沖縄県立埋蔵文化財センター、沖縄県立博物館

C組6班「沖縄から見た沖縄戦・日本本土から見た沖縄戦」

東江慶治さん、沖縄平和ネットワーク

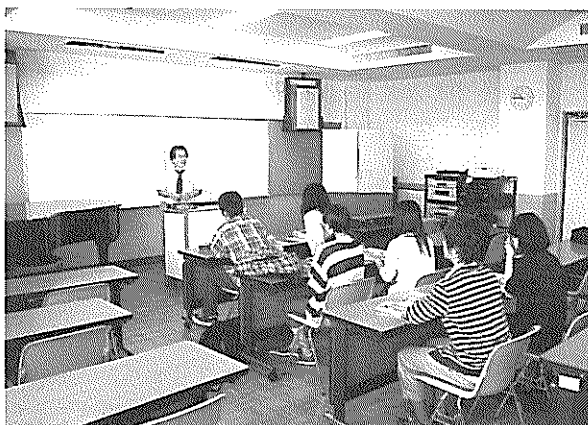


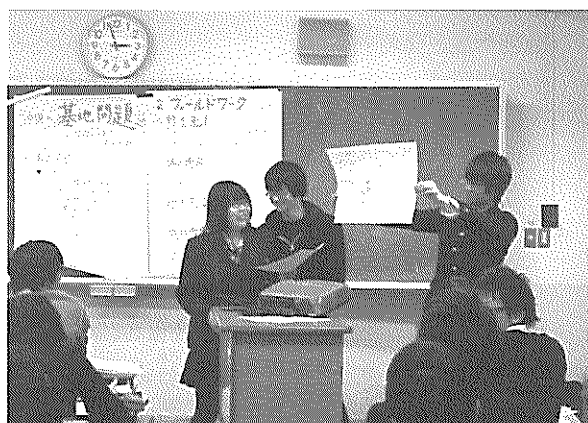
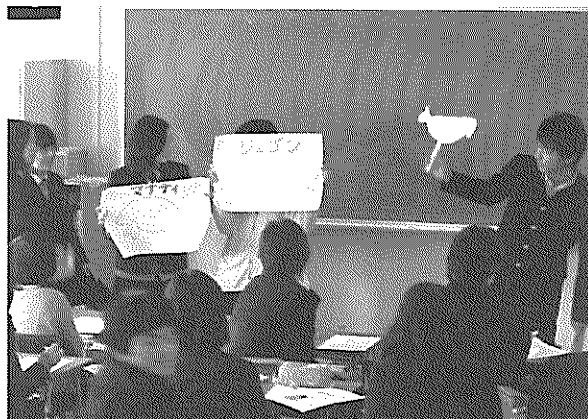
(4)集録作成と発表

研究集録は、研究旅行後、御礼状の執筆等を終えた後から作成を開始した。研究のページは各班4ページを割り当てたが、内容がおさまらずに6ページ執筆した班もあった。平和メッセージも再度書いてもらい、集録にのせた。年間計画に始まり、プレ研究・各班の研究、そして研究旅行のセレモニーで読み上げた平和宣言文・平和メッセージで締めくくる構成をとった。

発表の機会は2回設定した。1回目は各クラス内での発表、2回目は各クラスより2つの班を選抜しての発表とした（クラス代表となった2つの班には、1年生向けの発表も担当してもらった）。発表時間は15分とし、機材の使用は自由とした。パソコン・パワーポイントを使用しての発表が大半を占めたが、中には演奏を取り込んだり、劇を入れたりなど意欲的な試みもあった。

発表の際には、各班の発表のメモを取るためにワークシートを書かせた。ワークシートには、自分の班の発表を振り返っての感想を書く欄を設けた。時間配分がうまくいかなかったことを嘆くコメントが多い一方、見せることを意識していろいろと工夫したとのコメントもあった。これはコインの両面であろう。集録を読み上げるだけの発表はひとつもなかった。自分たちの発表への厳しい反省の一方で、「他の班の発表を聞いて、私たちが調べたことと内容に通じることがあって、おもしろいとなと思った。また新しい視点でのいろいろな話を聞いておもしろかった」など、他の班の発表に素直に賞賛の声をあげている生徒もみられた。「調べたことからこれから何をすべきなのか、何をできるのかについてもっと考えることができているればよかったと思います」との感想もあった。





4. 評価

(1)方法と基準

1) 指導教員の評価(ワークシートへの記入・提出、FW等への取り組み、集録)

→基準:ワークシート・集録の完成度、課題の提出状況、グループ学習への参加状況など

2) 生徒(本人)の自己評価(アンケート、各ワークシートの振り返り)

→基準:自己の成果と課題、グループの学習への寄与度の把握(事前事後アンケートの比較等)

3) 生徒間の相互評価(ディスカッション、グループ作業、発表)

→基準:話し合いへの参加状況、グループ学習への寄与度、発表の完成度

(2)生徒アンケートとその結果

最初の授業でプレ・アンケートを、最後の授業でポスト・アンケートを行った。

1) プレ・アンケートの内容と結果・分析

問1、今年の総人のフィールドとなる沖縄について

(a)「沖縄」と聞くと、どんな場所や言葉をイメージしますか。(最低3つはあげる)

(b) そのようなイメージをもったのはなぜですか。またどのようにして、そのようなイメージを持ったのですか。

(c) 沖縄に関する最近のニュースで知っていることは何かありますか。

問1の質問項目の設定の意味は、沖縄に対する生徒のプレ・イメージを確認し、一年の研究を終えた後、どのように変化するかを確認することにある。

問1(a)については、様々な回答がでた()の中の数字は、回答数)。

「海」(62)「基地」(41)「戦争」(37)「シーサー」(24)「サンゴ礁」(21)が多数回答であった。沖縄の自然・文化に対するイメージが優先していることが分かる。「基地」「戦争」の回答が多かったのは、昨年度の最後の総人の時間に一つ上の学年の発表を聞いていたことや、このアンケートを取った時間に「思いやり予算」についてのレクチャーをしたことなどによるものと考えられる。

問1(b)では、「ニュース」(28)「テレビ番組」(25)「観光イメージ」(16)「授業」(16)「行ったことがある」(11)が多数回答であった。興味深い回答としては、「中3の総人との関連で調べた」(4)「中学演劇コンクール」(2)があったことである。中学3年生では、高校2年生と同じく「国際理解と平和」を大テーマとして、広島をフィールドとして学習する。このことは、9月の学校祭における中学演劇コンクールにも影響を及ぼしており、中学3年生の演目には戦争をテーマとしたものが多い(沖縄に関するものとしては、「ヌチドタカラ」という演目がよくあがる)。中高一貫教育ならではの成果として実に興味深い回答である。

問1(c)については、「普天間基地・辺野古移設問題」(56)が圧倒的に多く、普天間に限らないものの基地に言及する回答が他に30強あった。一方、「なし」との回答も14あり、ニュース等で集中的に取り上げられていること以外については、あまり興味関心が持っていないのが実情だと感じた。

問2、「国際理解と平和」について

(a)「国際理解」のためには、どのようなことが必要だとあなたは考えますか。

(b)「平和」を獲得する、もしくは維持するた

めにはどのようなことが必要だと、あなたは考えますか。

問2の質問項目の設定の意味は、研究を始める前に生徒たちが、今年度の大テーマをどのようにとらえているかを確認すること、研究後の変化を確認することにある。

問2(a)では、「他国と自国の違いを知る」(24)「他国の文化・考え方などの理解」(21)「話し合い・コミュニケーション」(20)「互いに認め合う」(13)「受容」(13)が多数回答であった。

問2(b)では、かなり多様な回答が出て来たが、多数回答をあげると、「相互理解・尊重・協力」(17)「平和を願う気持ち」(14)「歴史学習・戦争反省」(11)「他者のことを思いやる」(10)である。

少数回答の中には、「完全なる平和の実現は不可能」などネガティブなものもあったが、おおむね自己の学習や態度によって問題を克服しようという姿勢が生徒たちの根底にあることがわかった。

問3、グループ学習について

- (a) 今までの経験を振り返って、グループで活動するとき、自分が得意とすること、グループの中で役立つことができることは、どのようなことだと思いますか。
- (b) 今年度の総人・グループ活動によって自分のどんな力が伸ばせる、もしくは伸ばしたいと思いますか？。

問3の質問項目の設定の意味は、今年度がグループ学習であることを踏まえつつ、どのような力を伸ばせる・伸ばしたいと生徒が自覚しているかを確認する点にあった。

問3(a)の回答としては、「文章をまとめる」(14)「意見を出す」(14)「他の人の考えを聞く」(11)「発表」(11)「B紙のまとめ」(10)などがあった。

問3(b)の回答としては、「チームワーク」(20)「自分と他人の考えをまとめる」(16)「他人の意見を聞く・受け入れる」(15)「意見を出す」(14)「表現力」(13)「自分の考えをまとめる」(12)などがあった。

自分の出来ることはきちんとこなす一方で、他のメンバーとの調整が必要であることを意識した回答が出るべくして出た感がある。しかしやはりここにも「自分の力を伸ばそうと思わない」とのネガティブな回答が少数ながらもあったことは、

予想はされたが残念なことである。

2) ポスト・アンケートの内容と結果・分析

問1、今年の総人のフィールドとなった沖縄について

- (a) 一年間の学習を終えた今、「沖縄」と聞くとどんな場所や言葉をイメージしますか。3つあげてください。
- (b) 一年間の学習を終えて、沖縄に対するイメージはどのように変化しましたか(「変化していない」というのであれば、なぜなのかを教えてください)。

問1の質問項目の設定の意味は、ブレとの比較により、現在の沖縄の問題を切り口にして、現代の世界が直面する「国際理解」の問題、「平和」の問題を考えさせるというねらいがどの程度達成できたかを、生徒の自己評価により確認することにある。

問1(a)では、「戦争」(61)が他を引き離して第一位の回答となった。以下、「基地」(48)「海」(32)と続く。興味深いのは、ブレと比較して顕著に増加した回答として、「平和」(2→24)「ガマ」(2→12)「文化の多様性」(0→14)「人とのつながり・絆」(0→10)などがあることである。この認識の変化には、一年の研究の結果、とりわけ研究旅行の体験の影響が大きいことがよく分かる。

問1(b)については実に多様な回答があったが、その傾向をおおまかにまとめると、以下のようになる。まず多かったのは「沖縄戦について認識を深くした」(23)「基地問題について認識を深くした」(18)という回答であった。ブレ研究およびグループ学習や研究旅行での見聞によってイメージが深まったということであろう。「沖縄の歴史について認識を深くした」(3)など沖縄に対してのイメージが広がったのもグループ学習などによるところが大きい。一方で「平和と観光が混在している」(2)、「沖縄戦の跡を残しているところと栄えているところとが場所によってわりと分かれている」(5)といった、それまでの学習を研究旅行における実際の見聞で修正したという意見もあった。と同時に「地元の人には愛がある」(11)といった、研究旅行の間での沖縄の皆さんとの交流によって新たなイメージが生れたとする生徒も少なくなかった。「日本にとっていろいろなことを考える上で重要な場所」「日本の問題や欠陥の象徴」というイメージを書いた生徒もあり、「沖縄は現代日本の持つ問題をかかえている

地域”という認識が深められたこともまた一年間の学習の成果である。

問2、「国際理解と平和」について

- (a) 今年度の総人の学習を踏まえて、「国際理解」のためにはどのようなことが必要だとあなたは考えますか。(選択肢より選択。複数回答可)
- (b) 今年度の総人の学習を踏まえて、「平和」を獲得する、もしくは維持するためにはどのようなことが必要だと、あなたは考えますか。(選択肢より選択。複数回答可)

問2は、「国際理解と平和」についてのプレ研究でのイメージがどのように変化したかを確認するための質問項目である。選択肢は、プレ・アンケートで出てきたものから抜粋した。

問2 (a) の回答は以下のとおりである。

- a 外国語(英語)の勉強(52)
- b 話し合い・コミュニケーション(84)
- c 自国および自国史の学習・理解(71)
- d 他国の文化・社会・考え方の学習・理解(93)
- e 中立的な視点(60)
- f 対等な関係(61)
- g 相手への思いやり(51)
- h 自己主張・積極性(46)
- i その他(12)

すべてにチェックを入れている生徒も少なくなかったため、どの程度の強度をもって必要と考えたかを図ることはできないが、全体的な傾向としては、d、そしてbが強いのが特徴である。選択肢がプレとポストで一緒でないこと、また選択肢の中にも内容的に重なる部分が少なくないこと等から単純な比較はできないが、総じてプレ段階と同じような意識を持ち続けていたということが言えそうである。

問2 (b) の回答は以下のとおりである。

- a 軍縮・核廃絶(43)
- b 相互牽制・核抑止(25)
- c 相互の理解・尊重・協力(84)
- d 歴史学習・戦争の反省(69)
- f 平等性(45)
- e 国際的なルール(48)
- g 政治力・外交力(42)
- h 欲張らないこと・完璧を目指しすぎないこと(19)
- i 「平和」を願う気持ち(67)
- j 他者を理解しよう・受け入れようとする

態度(73)

k その他(13)

これもまたすべてにチェックを入れている生徒がいたことも考慮しなくてはならないが、c、d、i、jが回答数が多く、やはりプレ段階と同じ傾向が見て取れる。集計をしていて気になったのは、逆のことを言っているはずのaとbに両方○をつける回答であった。平和教育に関する術語についても、生徒に理解させていく必要があることに気づかされた。

問3、グループ学習について

- (a) グループの仲間と協力することができましたか。(5段階評価)
- (b) グループの中で、自分の意見を出すことができましたか。(5段階評価)
- (c) グループの他のメンバーの意見を聞き、理解することができましたか。(5段階評価)
- (d) 今年度の総人・グループ活動によって、自分のどんな力が伸ばせたいと思いますか。(それぞれの項目について5段階評価)

問3の質問項目を設定した意味は、一年間のグループ学習を通じてどのような力を伸ばせたか、生徒の自己評価によって確認することにある。

問3 (a) の回答は以下のとおりである。

- a かなりできた(29人)
- b ややできた(68人)
- c どちらともいえない(12人)
- d あまりできなかった(7人)
- e まったくできなかった(0人)

肯定的な回答が大半を占めている。そう考える理由を自由記述で書かせたが、肯定的な評価をした生徒の理由としては「グループで分担できた」「自分の足りない部分をみんなが助けてくれた」といったものがあつた。否定的な理由としては「他人任せになることがあつた」「一部の人のみが頑張っている状態だつた」などというものがあつた。総じてグループ学習につきもののメリットとデメリットが出そろつた感がある。

問3 (b) の回答は以下のとおりである。

- a かなりできた(24人)
- b ややできた(62人)
- c どちらともいえない(22人)
- d あまりできなかった(6人)
- e まったくできなかった(1人)

問3 (a) や (c) に比べると、cの回答が多いが、それでも半数以上はできたと評価している。

「周りが積極的なので自分も発言できた」といったグループに触発されて意見が出せたという理由、「自分の意見で研究が進んでいった」といった自分の発言が肯定的に周りに受容されたという理由が、aやbの回答には見られた。否定的な回答の理由としては、「発言できる人を中心に進んでいった」「自分の意見をあまり持たなかった」というグループの中で流されていった感じのするものがあつた。グループ学習に先立って意見交換の作法などを確認しておくよかったのかもしれない。

問3 (c) の回答は以下のとおりである。

- a かなりできた (32人)
- b ややできた (66人)
- c どちらともいえない (11人)
- d あまりできなかった (4人)
- e まったくできなかった (0人)

問3 (a) (b) と比べると、aの回答が多い。問2で「他者を受け入れようとする態度」が重視されていたが、それはグループ研究の中でも活かされていたということであろうか。「メンバーの意見を尊重しつつ、自分の意見を伝えることができた」「いろいろな意見を聞いて参考することができた」といった理由が多かった。

問3 (d) では、今年度総合人間科で目指した伸ばしたい力と本校SSH教育プログラムが目標とする生徒の学びの力を念頭におきつつ、4つの項目について聞いた。

①現在の問題を認識し、その原因を探っていく力

- a かなりできた (36人)
- b ややできた (64人)
- c どちらともいえない (16人)
- d あまりできなかった (0人)
- e まったくできなかった (0人)

②現在の諸問題の關係性を認識し、整理・分析する力

- a かなりできた (26人)
- b ややできた (68人)
- c どちらともいえない (19人)
- d あまりできなかった (3人)
- e まったくできなかった (0人)

③発表・表現する力

- a かなりできた (20人)
- b ややできた (57人)
- c どちらともいえない (16人)
- d あまりできなかった (12人)
- e まったくできなかった (0人)

④グループで協力して課題を設定しその課題を

解決する力

- a かなりできた (38人)
- b ややできた (52人)
- c どちらともいえない (10人)
- d あまりできなかった (4人)
- e まったくできなかった (1人)

おおむね肯定的評価であった。細かく見るならば、②と③はc・dの回答がやや多く、このあたりに不安を感じる生徒が多かったことを示している。③におけるc・dの多さは、先に触れたように生徒たちが完璧な発表をやや理想としすぎていることによるものと思われる。発表を聞いている最中に書かせた生徒のワークシートには、発表の評価を5段階でさせたが、ほとんどがAもしくはBであった。このあたりは自己評価の限界であろう。

問4、研究旅行の中で最も印象に残っている場所・プログラムはどれですか。

回答は以下のとおりである。原則として一つのみを回答してもらうつもりだったが、複数回答した生徒もいる。

- a 轟の壕 (および平和セレモニー) (48)
- b ひめゆりの塔および資料館 (8)
- c 首里城 (11)
- d 安里さんの講話 (18)
- e 嘉数高地 (3)
- f 平和祈念資料館 (8)
- g 国際通り散策 (21)
- h エイサー体験 (19)
- i フィールドワーク (32)
- j 平和メッセージ執筆 (4)
- k 安保の見える丘 (道の駅かでな) (3)
- l その他 (5)

一番回答が多かったのは、轟の壕であった。昨年までと違い今年度初めて入った壕であるが、120人が入るには狭く、壕の中で行う予定であったセレモニーを外で行った。また飛行機の時間の関係などから、沖縄最初の見学的地となったのが轟の壕であった。「今まで体験したことのないしめっぽさ、せまさ、あつさだったから。当時の人のことを考え、より、辛く、印象に残った。」「思ったより蒸し暑く、私たちが入ったときよりもさらに暑いときに生き残るために何ヶ月もここで暮らしていた人たちがいるのかと思ったら、命って大事だなどおもった。」などという理由が自由記述の欄にはあつた。マイナスの環境で壕を体験したことが、かえってリアルな感覚を生徒た

ちに与えたようである。フィールドワーク・安里さん講話をあげる回答が多い一方、国際通り散策やエイサー体験をあげた回答が多いことには当世の高校生気質を感じる。

問5、研究を振り返っての反省・課題（今後調べてみたいことなど）はどんなことですか？

問5は、総人研究を振り返ってどのような課題を発見したかを確認するための質問項目で、自由記述である。

反省としては、これまであがってきたものと重複するが、「積極的にテーマの関連事項を調べればよかった」「発表の準備をもう少ししっかりしたかった」「グループでもう少しまとまって学習すべきだった」という回答が多かった。

今後の課題としてあげたことを傾向としてまとめると、多かったのは他のテーマについても調べてみたいという回答だった。特に基地問題についての言及は多かった。普天間基地移設が報道されていた時期であることもあり、生徒も関心はあったものと思われる。一年間の研究を通じて、ようやく問題として実感したということであろうか。また「戦争の問題について語り継いでいく必要がある」との回答も複数あった。「今後の国際平和を実現していくために自分たちにはどのようなことができるか」といった視野の広い問題意識、「沖縄の問題を日米外の国、世界という視点で見直してみたい」という広い視点から問題を見つめ直したいという回答、「報道以外の一住民の声をもっと知りたい」という地域に根ざして再検討してみたいという回答などもあった。

問6、一年間の研究の自己評価はどうですか。
(3段階評価)

問6では、総人研究を振り返っての自己評価をしてもらうことで、グループ学習を通じて、相互理解を深め、協力して問題解決にあたる姿勢を持つ、という目標が達成できたかを確認することをねらいとした。回答は以下の通り。

- A とてもよくがんばった (47人)
- B がんばった (62人)
- C あまりがんばらなかった (5人)

これもまた肯定的な回答が多く得られた。人任せになってしまうことがあった」「もう少し発言できるとよかった」などという反省はあったものの、総じて「これまでのノウハウと時間をかけて研究をやりきることができた」「自分の分担する

仕事を責任を持って果たせた」という理由が多くみられた。

これまでの総人プログラムの経験の蓄積、グループ学習、研究旅行という要素が絡み合うことで、充実した学習活動ができたことと生徒たちが感じていることを、ポスト・アンケートの結果は示しているのではなかろうか。

5. 成果と課題

(1)グループ決め

グループ学習を行う高校2年生の総合人間科において、悩みの種が研究グループ決めである。プレ研究後の約半年の総合人間科の授業時間と研究旅行3日目だけの付き合いにすぎないと教員は思うが、生徒たちにとってはそうではないようであり、早い段階からどのようにしてグループを決めるのかという生徒からの質問が多かった。

今年度は「沖縄の基地問題と平和」「沖縄の自然環境と平和」「沖縄・アジアの国際環境と平和」「沖縄の文化と平和」「沖縄の歴史と平和」「沖縄戦と平和」という6つのテーマを設定し、各クラスごとにそれぞれのテーマを研究することを希望する生徒を集めたグループを作る方法をとった。生徒に研究したいテーマ・その理由を書かせるアンケートを実施し、教員で振り分けた。ポスト・アンケートの記述を見ると「人数が足りない」「最後までまとまりのないメンバーだった」「嫌いなやつが班員にいらいらがつのった」などという否定的な意見はあったもの、一方で「周りが積極的なので自分もそうなれた」「最初はぐだぐだで話し合いが全くできなかったが、最後のところで何とか話し合うことができた」「今まであまり話をしたことがなかったけど活動を通じて仲良くなれた」など、仲良しメンバーではなかったがゆえに色々と触発し合うこと、気がつくこと、成長することもあったようである。

高校2年目ということで、1年次に担任団が課題としていた「融合」を気にすることは少なくなったが、それでも新たな人間関係を生み出す良い機会として今年度のグループ決めは作用したように思われる。

(2)轟の壕

アンケートの結果・分析の項でもふれたが、今年度は諸事情により壕での体験を、いままでの糸数壕ではなく、轟の壕で行った。轟の壕は、プレ研究の映画「月桃の花」の主人公のモデルであり、一日目に講話をお願いした安里要江さんが実際に入っていた壕である。自分たちが入った糸数壕を安里さんの壕だと勘違いする生徒は少ない。その意味でも、轟の壕に入ることは意味があるように思われ、

平和ガイドの新島メリーさんとの相談の結果、決定した。

しかし当日は大変だった。到着後、昼食中に沖縄にしては珍しい大きな地震に見舞われ、動揺したままその直後に壕に入った。しかも生徒120人という数を実際に入れてみると先発の生徒はあつというまに壁でストップし、そこに後ろからどんとと生徒が入ってくる。無理無理に生徒を詰め込む。雨天の関係もあって息苦しい。その思いだけで、あとは地上に出た。いままで糸数でやってきた光のない完全な闇の体験、平和宣言文の朗読はできなかった。ただの洞窟探検だけに終わってしまったのではないかと危惧が頭をかすめた。

その後、地上で平和宣言文を朗読し、メリーさんはこの蒸し暑い環境で沖縄戦の最中、多くの人が壕の中で息を殺していたことを生徒たちに語ってくれた。結果、ポスト・アンケートに見るように、生徒たちにとっては大きな意味ある時間となったようで非常にほっとした。

壕が平和教育の中で活用されるのは、本物に触れるという意味で大事なことである。しかしその一方整備が進んだ壕は観光地となりつつあることも事実である。何度か沖縄へ引率するたびに、生徒たちが暗闇体験のみを持ちかえることになってはいないか危惧していた。その意味で今年度研究旅行の轟の壕体験は、文字通り手探りの部分が多いものの生徒たちへのインパクトは大きく、沖縄戦における住民の労苦の一端を体験する為に重要な成果であったと思われる。

(3)課題

11月の研究旅行から逆算して、高校2年生のプログラムは構成される。そのため、遠隔地である沖縄のアポ取りを早めにとることが優先され、研究テーマを選びその方向性を煮詰めた上でフィールドワーク先を探すということが困難になっている。また事前研究が行き届かず、白紙に近い状態でフィールドワーク先にお話を聞くことも少なくないようである。可能であれば、プログラムを前倒しして高1の3月頃に沖縄に関する基礎的知識を学ぶ時間をとり、高校2年生の最初の段階から研究がスタートできると、十全な状態でフィールドワーク先選択・訪問ができるのではないかとと思われる。最終時間の高校1年生に対する発表という形で、高1総合人間科プログラムとの連続性・連携をとっているが、それも含めて今後検討していく必要はあるのではないだろうか。

また平和学習ということで、沖縄戦に関するプログラムが例年充実しているが、今年度は「現在」ということを意識してみた。それは平和の問題が沖縄

戦という過去の振り返りだけではなく、基地問題など現在進行形の問題としてもあるためである。将来的に沖縄戦体験者の話を聞いて追体験するということが困難になっていくことも考えるならば、現在の沖縄に力点を置いて今後の高校2年生総人のプログラムを考えていくことも必要なのではないかと思われる。研究旅行の行程上やむを得ないが、安保の見える丘見学は、あまり状況を理解しないまま、帰りの飛行機の時間を気にしつつ進められている。フィールドワークで補う方法もあるとは考えられるが、今日の世界情勢・日米関係、そしてその中の沖縄の位置づけという「国際理解」の側面をどうプログラムに組み込んでいくかが今後の課題であろう。ポスト・アンケートの中で基地問題やこれからの沖縄・国際問題を今後考えて見たい課題としてあげる生徒が多かったことを、今年度の実践における取り敢えずの成果として確認しておきたい。

(文責・曾我雄司)